

「見習いサンタからの贈り物」

ノベル小説コース 二年一クラス

飯嶋

久美子

あらずじ

時は明治時代。少女、雪里蓬は亡くなった伯父の遺品整理をする為、彼の家に向かった。伯父の家で謎の男、ボウと出会い、自分がサンタクロースの素質を持つことを伝えられる。

ボウはサンタクロースの素質がある物が通う学院の教師であった。蓬はボウから、サンタクロースの詳細や伯父がサンタクロースであった事実を教えられる。学院の決まりによって、素質を持つ蓬はサンタクロースを目指すことになった。

蓬はサンタクロース修行の一貫として、手紙をとある男の元に届ける。その手紙は、男が鼻屑にしている遊女からの茶会の招待状だった。

修行を終えた後、蓬は隣家の青年に教えられた植物知識によって、茶会に出される茶に毒が盛られていると知る。

蓬はボウから与えられたサンタクロースの魔法の道具を使い、遊郭に忍び込む。そして、死を事前に防ぐことに成功する。茶会を催した遊女、お鈴に話を聞くと、毒は過失ではなく、故意で盛ったと告白する。

客を殺そうとした理由を聞いた蓬は、お鈴に深く同情する。彼女の願いを叶えようと決心し、魔法の道具の力で、お鈴と共に遊郭の世界を脱出する。

蓬はお鈴を彼女の故郷に送る。長年故郷に帰ることを夢見ていたお鈴は蓬に礼を言い、二人は別れる。こうして、見習いサンタクロースの蓬は殺されるはずだった客には未来、籠の鳥だったお鈴には幸せの贈り物を届けたのである。

蓬の行動を影で見守っていたボウも、蓬のこれからの成長に期待するのであった。

サンタクロースみたいだね

新聞紙にくるんだあじさいを受け取った青年は、そう呟くように言った。あじさいを渡した少女、雪里蓬は初めて聞く言葉に首を傾げた。

「サ、サンタクロース？ 楓兄さん、それは西洋のお菓子の一つですか？ だとしたら、私はお菓子ではありません！ 食べても鉄みたいな血の味がするだけで、不味いです！」

「違う、違う」蓬の反応が面白かったのか、文机の前に座る青年は片手を口に添えて、小さく笑った。

蓬をサンタクロースと言ったこの青年は、白村楓という。一年前に、家が呉服屋である蓬の隣りに越してきたのだ。まだ19という若さで一人暮らし、さらには質屋を営んでいるものだから、蓬の母が慌てふためいた。

「あの子、ちゃんと食べているのかしら……。マッチ棒みたいな細い体……。少し風が吹いただけでも折れてしまいそうだよ。何か作って栄養をつけさせないと……」

あの子というのだから、蓬の母にとって楓は息子同然だった。母は娘を経由して、愛情たっぷりの手作り料理をこれでもかというほどに、楓におすそ分けした。我が家の食卓に招いたことも何度もある。母がそこまで親類でもない楓に世話を焼くのは、数年前に風邪をこじらせて死んでしまった兄の影響かもしれないと蓬は思う。楓も緊急の事情でもない限り、「いつもすいません」と頭と小さく下げて、我が家の誘いを断らなかつた。

蓬もこの青年のことが好きだった。いつも優しく接してくれ、相談を持ち込むと親身になって一緒に解決案を探してくれるのだ。

そして今日、いつものように料理ではないが、庭に咲いたあじさいをおすそ分けしたら、楓に「サンタクロース」と意味不明な言葉を言われたのだ。

「サンタクロースというのは、このことだよ」

楓は読んでいた本を蓬に見せた。頁に描かれた色とりどりの絵に心揺さぶられて、蓬は「綺麗……」と感嘆を漏らした。

赤い服をきた老人が、西洋のベッドという足の生えた布団で眠っている子供に贈り物を与えている絵だった。絵が描かれていない所にサンタクロースの説明と思しき文があるのだが、海外の言葉なので何と書かれているのかわからない。

明治になってから、西洋の文化がこの日ノ本にたくさん入ってきた。石造りの建物に着物と違い装飾豊かな洋服、可愛らし過ぎて食べてしまうのも躊躇うほどの西洋菓子などなど。大勢の人と同じく、蓬もこれらの文化に魅せられた一人だ。

「サンタクロースは、師走の二十四日の夜に子供達に夢と希望を与えてくれます」

楓が異国の文字を指さして、訳してくれた。楓は優しいだけでなく、蓬が知る誰よりも博識だ。歩く学び屋だと、蓬はいつも思っている。

楓は本を示していた指をゆっくりと蓬に向けた。

「そして今日はその師走の二十四日……。クリスマスだ。君はあじさいという贈り物を僕に

してくれたよね。……朝だけだね」

「なるほど、だからサンタクローズということですか……。それにしても羨ましいです」  
「サンタクローズが？」

「いいえ、子供の方です。寝ているだけで夢と希望をもらえるなんて……。何だかずるいで  
す。日ノ本の神様や仏様も赤い着物を着て、私達に贈り物をしてくれないでしょうか……。」  
神様や仏様がサンタ服を着ているところを想像したのか楓が小さく笑うと、外から蓬を  
呼ぶ声があった。

「お母さんだ。いけない、急がないと！」

「どこかに行くの？」

「先月亡くなった伯父さんの遺品整理を任されているんです！ 今日忙しいったらあり  
やしない！」

蓬は家は隣りだというのに、駆け足で質屋を出た。そして、蓬は胸の底で小さく、だけ  
ど心強く願った。

サンタクローズさん。私に愛しい 楓 兄さん 人の心をください——。

長年の鎖国を解いた江戸幕府。とある異国の商人が江戸郊外に屋敷を建てた。しかし、  
元号が明治に変わったと同時に、商人は故郷に戻らなければならぬ事情が出来てしまっ  
たそうだ。そこで商人は、親友の日本人に我が家を差し上げたという。その親友が蓬の伯  
父である——。

(いつみてもすごい家です……)

蓬は都市開発が進む東京で珍しく残っている森をくぐり、目的地に着いた。

白を基調にしたレンガ造りの屋敷。伯父が手入れを怠っていたので、庭は雑草が闊歩し、  
屋敷にも蔦が巻きついている。伯父の身内でなければ、廃墟見聞違えるだろう。

「さてと、仕事を始めなくては！ 急がないと日が暮れてしまいます」

といつても、蓬の家はここから歩いて三十分ほどの距離だ。蓬が焦るのは、暗くなると  
物の怪が出そうな雰囲気と化した森を歩きたくないからである。

蓬は両開きの白い扉の前に立ち、金の取手を握った。ギギギと耳につく開閉音と同時に、  
湿った埃の匂いが鼻を犯してくる。伯父は掃除までもまともにしていなかった人物なので  
ある。その悪い空気に肺を刺激され、蓬はせき込んだ。

(これではおじさんが、脳に出来た腫瘍よりも、肺炎になって死んだという方がしつくり  
きます。——ん？)

蓬は悪い空気によって悲鳴を上げている口を覆いながら、目を疑った。

視界に入ってきたのは、バナラ色の壁を背景にして佇む鷺だった。鷺の身長は、蓬より  
も30センチ以上も高かった。

(……鷺？ どうして、部屋の中に鷺がいるのでしょうか？)

事態がさっぱり飲み込めないまま、蓬はパチクリと瞬きをした。すると、だんだんと目  
の前の状況が明白になってきた。

鷺の被り物をした、背の高い男が立っているのだ。被り物と丈の長い黒いローブのせい

で、性別はわからないが、肩が幅広く無骨そうなのできつと男だろう。

「——ひっ!？」

その鋭い茶色い瞳が自分の方を向くと、蓬はとても怖くなった。腰を抜かし、扉を背にしてうずくまる。すぐさま屋敷から出てきたいが、体は他人のものとなったみたいに行くことをきかない。

蓬を凝視したまま、鷲男は彼女に歩み寄る。蓬は地震が起きているのではないのに、頭を抱えて怯えながら、精一杯の力を込めて何とか声を振り絞った。

「あ、あなたは誰です……!？ もしかして、お尋ね者ですか？ そ、それなら、そうぞ好きなものを盗って行ってください。で、ですから……乱暴しないでください……」

被り物の男は立ち止まり、ゆったりとした動作で蓬を指さした。たったそれだけのことに、頭が混乱している蓬には彼の伸ばしたひとさし指が銃に見えて、短い悲鳴を上げた。

「……お前が雪里蓬か」

雪のように静かな声だった。

男の静かな問いかけを聞いて、蓬の混乱している頭はだんだんと落ち着いていった。蓬はおそろおそろ頭で組んでいた腕を外した。

「……どうして、私の名前を？」

「鳴らせ」

男は懐から手持ちのベルを取り出し、蓬に突きつけた。

「え？」

「鳴らせ」

蓬はおそろおすと立ち上がり、鐘を受け取った。表面に大きく雪の結晶模様が彫られた銀の鐘だ。

「鳴らせばいいんですね……。えい」

手に持ったものを左右に振れば、カラン、カランと当然の答えが鐘から返ってくる。この人は何をしたいのでしょうか？ 蓬が首を傾げると、「やはり」と被り物中から声が聞こえた。すると、いきなり彼は蓬の肩を掴んだ。蓬はビククリして、また情けない悲鳴を上げってしまう。

「——お前はサンタクロースだ」

男が何を言っているのかわからなかった。同時に今朝、楓に教えられたことが頭で蘇る。

『サンタクロースは、師走の二十四日の夜に子供達に夢と希望を与えてくれます』

蓬は首を振り、引きつった笑みを浮かべた。

「冗談でしょう？ 鐘を振っただけでサンタクロースだなんて……」

「私は嘘はつかない。その鐘をよく見てみる」

「え……？ ——ああ!」

鐘の内部を見ると、ぶつかり合い、音を生み出す金属の部分がなかった。これでは、鐘を鳴らすことなど出来ない。

「じゃあ、さっきはどうして鐘が鳴ったのでしょうか……」

「その鐘を鳴らすこと出来るのはサンタクロースの素質を持つ者だけなのさ。——とりあえず」

驚男はローブの内に手を入れた。ほどなくして、懐から出てきた彼の手にはコースターに乗ったカップが二つあった。容器だけだと思い込んでいたら、なんとカップから湯気まで出てるではないか。

「中で茶でも飲みながら、ゆっくりと話をしよう」

彼は尖った嘴で、後ろの居間に繋がる扉を指した。

信じられないことが相次いで、蓬はもう倒れてしまいそうだった。

驚男はボウと名乗った。日ノ本からはるか遠い北の国、フィンランドにある聖キリシア سانتクロース学院の教師らしい。名前の通り、彼の務める学院は سانتクロースを指す少年、少女が学問に勤しむ学び舎だという。

「外国の方だったんですね。悠長な日本語でしたので、てっきり同じ日本人だと思っちゃいました」

「……祖母が日本人だったのだ。幼い頃、祖母から日本の言葉だけではなく文化も教えてもらった。——さてと、本題に入ろうか」

蓬は居住まいを直し、彼の茶色い瞳を見つめた。ボウに対しての恐怖は大分消えていた。二人がいる居間は、肌色の壁と白のフローリングで形成されている。蓬たちが座っているソファの他には、複数の本棚と数え切れないほどの骨董品が部屋を占領している。日本人形から自分にも描けるんじゃないのかと思えてしまうくらい下手な絵画まで揃っている。それらのせいで元は広かった居間も、狭く感じてしまう。

「君の一族はね、代々 سانتクロースの家系なんだ。残念ながら、君の父君にはその素質がなかったそうだがね」

「素質……？」

「そうだ。 سانتクロースは憧れれば誰もがなれる簡単な職業ではない。それ相応の素質がいるのさ。素質がなければ、 سانتクロースの血を引いていても、諦めるしかないのさ」  
驚男は懐から、先程蓬が鳴らした鐘を取り出した。

「素質の有無の判定は、この鐘で決める。鳴れば سانتクロースの見込みがある。そうでない者は سانتクロースへの道を歩けない」

驚男が握ったものを振ると、カランカランと常識的に考えれば鳴るはずのない鐘は音を響かせた。

蓬は高さの低いテーブルに置かれたカップに手を伸ばした。西洋の茶器なので、中は紅茶だと確信していたら、緑茶だったので驚いた。

（私は سانتクロースにしか音が出ない鐘を鳴らしてしまった。……これはもう、自分が سانتクロースだと認めなければなりません）

蓬はお伽噺のような事実と一緒に、緑茶を飲み込んだ。異国の茶器で慣れ親しんだ緑茶を飲むのは何だか不思議な気持ちだった。喉を潤わせると、コースターの上にカップを置いた。

「……でも、父は素質がないにしろ、自分が سانتクロースの血を引いているとは知らなと思います。それどころか、 سانتクロースの言葉自体、聞き覚えがないはずです。現に娘の私も今朝初めて楓兄さ……隣人に教えてもらいましたから」

「当然だろう。 سانتクロースは己の正体を周囲に話すことを禁じられているんだ。例え、

素質がない身内にも」

なるほど、心中で呟きながら蓬は、熱が冷め、湯気が見えなくなったお茶を見つめた。黄緑の水面には、自信なさそうな顔をしている自分がおぼろげに映っている。

「……質問があります。どうしてボウさんは、死んだ伯父の家に来たんですか？　なぜ、私の名前を知っているんですか？　初対面であるのに、どうして私にサンタクロースの素質があると思ったのですか？」

蓬の問いかけに、ボウはローブの中から手紙を取り出し、テーブルの上に添えた。

「一か月前、君の伯父——雪里紅葉から便りをもらった。自分の死を悟った彼の遺書ともいえよう」

「ええ！？　なぜ、親類でもないボウさんに遺書を！？」

蓬は既に切られている開け口から手紙を取り出し、広げてみたが、ミミズみたいな異国の文字だったので何と書かれているのかさっぱりわからなかった。

「——紅葉は私の教え子だった」

「ということは、伯父さんにはサンタクロースの素質があつたの？」

ボウは頷いた。

「紅葉は素質のない弟からサンタクロースの資格を持つ君が生まれるとはまるで思っていなかったようだ。……まあ、多くのサンタクロースが紅葉と同じ考えなのだがな。……手紙にはこう書かれていた」

ボウは咳を一つしてから、手紙の内容を訳した。

『お元氣？　先生。早急に伝えたいことがあって、筆を執った次第だ。あの事實は、俺が三十路になった日に知ったんだ。……八歳の姪の蓬が自分を祝いに、初めて屋敷に来た。異国の文化が大好きな姪は、この西洋様式の屋敷だけではなく、俺が集めた骨董品にも夢中になった。その時に彼女は鐘を鳴らしてしまったのだ——まさか、あの弟から素質を持った娘が生まれるとは……顎が外れるほどに驚いてしまった。鳶が鷹を生むとはまさにこのことだな』

（そういえば、そんなこともありましたね）

話の途中で、蓬は六年前、この屋敷で大はしやぎしていた過去を思い出した。あの時にも、自分はサンタクロースの素質を測る鐘を鳴らしていたのだ。

『この事実を学院に伝えるかおおいに迷った。結果、姪は学院の入学可能年齢を過ぎているのだし、このまま何も知らないで育った方がいいのではと結論に至った。しかし、死期が近づくと、自分でもわからないが、あの結論は間違いであったと自分を責めるようになった。でも今更学院に報告出来る勇氣は俺にはない。だから、家族のように信頼するボウ先生に姪の教育をお願いしたい。もし先生がこの頼みを受けてくれ、俺の元を訪れても、その時には俺はこの世にいないだろう。さようなら、先生。そして、姪を頼んだ』

話終えたボウはカサカサになった喉をお茶で潤わせた。

「手紙の通り、俺はどうとう彼には会えなかった。手紙をもらってすぐにも日本に飛んでいきたかったのだが、学院の仕事が片付かなくてな……」

ボウは俯いた。しんみりとした空気が変わったので、蓬はしばらくの間何も言えなかった。やがて、蓬は控えめながらも、一番気になっている質問をした。

「あの……伯父さんが言う教育とは何のことですか？」

ボウはハツとしたように顔を上げ、鋭い目を蓬に向けた。

「何って……サンタクロース修行のことに決まっているだろう。サンタクロースの素質を持つ者は皆、聖キリシアで勉強を受けると定められているのだ。しかし、手紙にも書いてあったが、君は入学可能年齢を過ぎており、聖キリシアに行くことは許されない。だから、派遣教育として私がここに訪れたのだ」

「じ、冗談でしょ!？」

蓬はバンとテールを叩き、立ち上がった。

「私はサンタクロースになるつもりなんて一切ありません! それが伯父の願いでも! ですからボウさん、はるばる日本まで来てもらって悪いのですけれども、お引き取りになつてください」

蓬は大股で歩き、居間を出ようとする。「仕方ない」後ろからボウの声が聞こえると同時に、蓬の足は何かにつままれ、転んでしまった。

「い、いたたた……。何!？」

足首を見ると、縄が絡まっていた。コツ、コツとボウのブーツの音が響く。近づいてくるボウの手には、いつの間にか縄が握られていた。

「決まりを破ることは許されない。もし、どうしても修行を拒むというならば——」

ボウは縄を投げ捨て、懐から黒く光る鞭を取り出した。縄が彼の手から離れると同時に、蓬の足の拘束も解かれた。

「一打ちで相手を服従する魔法の鞭で、君に修行を受けさせる——。さあ、どうする?」

「……」蓬は奥歯を噛みしめた。そして、しばしの沈黙の後、蓬は正座をし、床に手先をつけて、頭を下げた。

「……よろしくお願ひします、ボウ先生」

蓬にとって、サンタクロースになるよりも、ボウの言うことを大人しく聞く人形になる方がもつと嫌だったのだ。

場所は変つて屋敷の外。広い庭には、裸体同然の女や動物などの石灰で作られた彫刻が飾られているが、一面を覆い茂る雑草のせいで、その魅力はまるで感じない。むしろそれが、屋敷を廃墟だと思わせるのに一躍買っているともいえる。

ジャングルと化した庭で、蓬とボウは向き合う形で立っていた。

蓬の格好は着物から、洋装に変わっていた。先端に白く丸い綿の玉がついた赤い三角帽子を被り、袖や裾を綿で飾られた長袖のワンピースを着ている。履物は編み上げの黒いブーツだ。

(……はあ、着替えるだけでも疲れました)

たったそれだけのことでボウとひと悶着があった。

「洋服の着方がわからないだろう。俺が着せてやるからこっちに来い」

蓬は赤面して、全力で断った。異国文化大好きな蓬は、洋装を幾つも持つており、着方もマスターしていた。だから助けはいらないと説得させたのだが、それでもボウは心配で仕方ないらしく、蓬が着替えている衝立の後ろでじっと待っていた。勿論、ボウには破廉恥な気持ちなどではなく、素直に生徒を心配しているととてもわかる。

(……だけど、嫁入り前の体を見せるわけにはいかないですもんね)

蓬は胸を飾ったブローチにそっと触れる。金の縁で囲まれたのは、光沢のある水晶だ。これは、サンタクロースの身分を表す水晶だとボウに教えられた。一人前のサンタクロースに近づく度に、水晶の色が濃くなるのだという。見習いの見習いである蓬の水晶は、無色だ。

ボウが一つ咳をしたので、蓬は背筋を伸ばした。

「それでは、サンタクロースの基礎訓練を行う。まず、これを見てみる」

ボウは持っていた袋から、見たことのない木製の乗り物を取り出した。拳ほどの袋には見合わない大きさのものが出てきたことに、蓬はもう驚かなかった。

「わあ……。この乗り物は何といたのですか？ それに、乗り物を引っ張る鹿みたいな木彫りの動物は何ですか？」

乗り物の先端に繋がれた縄の先には、立派な角を持つ動物の木製の彫刻が行儀よく佇んでいる。

「乗り物はソリという。サンタクロースが仕事をする時には必要不可欠の乗り物だ。そして、縄で繋がれている動物はトナカイ。……今は木彫りだが、サンタクロースの基礎試験に合格すれば、学院から本物のトナカイをもらえるぞ」

蓬は乗り物の座席に座り、何となくトナカイを操る手綱を握ってみた。すると、木彫りのトナカイが自分に向かって片目を閉じたので、不覚にも蓬は驚いてしまった。その反応を見たボウは説明をする。

「これは魔法の木で作られているのだから、木彫りでも動くぞ。——では、操縦の仕方を教えるでしょう」

「待って！ まずは私にやらせてみてください。私、馬車を運転したことがあるんです。ソリもそれと似たようなものですよ。——さあ、動いてください！」

「馬鹿、やめろ！」

ボウが叫ぶのと同時に、蓬は手綱を思い切り引いた。木彫りのトナカイはプギイと鳴いて、動き出した。しかし、このまま前進するという蓬の確信は裏切られた。ソリがトナカイと共に宙に浮いたのだ。

「え、ええ！？」パニックに陥った蓬はバランスを崩してしまい、ソリから転げ落ちた。乗り手がいなくなったソリも、ゆっくりと着地する。

「い、いたいです……」

教え子の情けない姿に、ボウは片手を額に当てて、疲れた息を吐いた。

「サンタクロースのソリは普通のと違う、空も飛べる。ただ、木彫りのトナカイだと五メートルぐらいしか浮かべないがな。……それと、実践は私が説明した後にしる。これは命令だ」

「はい……」地面に寝転ぶ蓬は目を回しながら、答えた。

それから蓬はソリの運転の仕方を学び、その後に実際に試してみた。危なっかしいものではあったが、何とか運転出来るようになった。

「——次はこの鐘だ。振るだけで、雪を降らせる力を持つ。さあ、やってみろ」

蓬は手持ち型の鐘を受け取り、音を鳴らした。その途端——、

「——ぶっ!?!」

雪の塊が蓬を目がけて落下したのだ。

(……確かに雪は雪ですけど……自分が思っていた雪とは違います！)

「……ちなみに、鐘の効果はサンタクロースの階級によるがな」

「先に言ってくださいよ！」

雪の塊から顔を出した蓬は大声を上げた。

ボウの掌に置かれたのは、雪の結晶をした飴だった。あまりにも美しい飴なので、思わず蓬は指の腹で飴に触れてしまった。

「これを口に含めば、吹き出す息は氷河の如く冷たいものとなる。これは鐘と違い、階級は関係ないから安心しろ。——これで一通り、サンタクロースの基礎については話終えたぞ。お、おっと忘れるところだった」

教師は飴を懐にしまうのと入れ替わりに、大きな白い袋を取り出した。何も入っていないので、だらりと縦に伸びている。ボウはそれを軽く投げて、蓬に寄こした。

「サンタクロースの道具をこの中にしまっておけ。魔法の糸で作られているから、馬車の一台や二台でも楽に入れられるぞ。あと、さっきの飴はこの袋の中にあるからな」

蓬は頷き、早速作業に取り掛かろうとした。しかし、その前にボウがローブの内から出した紙片を蓬に押し付けた。

「……今日の課題だ。届けに行け」

蓬は突き付けられたものを見つめた。紙片は文であった。裏返すと線の細い文字で送り主の名前と送り先の住所が綴られていた。

「……手紙を配達することがサンタクロースの修行なのですか？ 私はてっきり——」

「クリスマス夜の夜に、贈り物を配ると思っていたのか？ 愚か者。いきなり、見習いにそんな大事なことを頼めるか。見習いは手紙などの配達を積み重ねて、己の力を高めていくのだ」

聖キリシア学院はサンタクロース教育の為に、郵便機関に請け負った手紙の一部をわけてもらっていると、ボウが説明した。ただし、己の正体を明かさないとこの鉄の決まりがあるので、サンタクロースと関わっていると知っているのは組織の幹部だけらしい。

道具を袋にしまい終え、配達に行こうとする蓬の背中にボウは声をかけた。

「——君が課題を放棄しようとしても、この私には全てお見通しだ。無駄なことは考えなよ」

赤く染まる空の下。店じまいを始めている商店が並ぶ通りを、蓬はとぼとぼと歩いていった。

基礎訓練の後、蓬はどうか課題をこなした。しかし、手紙に書かれた住所を調べ、そこに行くのにかかりの時間がかかってしまった。さらに、配達が完了したことを屋敷で待つボウに報告すると、日はどっふりと暮れてしまった。結局、恐れていた暗い森を歩かなければならなかった。

「——では、明日。またこの屋敷で待っている」

帰り際、ボウに言われた言葉。それは、明日もサンタクロース修行があるという意味だ。(修行って毎日するのでしょうか。……だとしたら、困ります。私だって平日は学校があ

りますのに……それに、あの恥辱を毎日味わうなんて絶対に嫌です！)

蓬は山吹色の着物に戻った自分の格好を見下ろした。

「――誰だ、あんた？ 俺に何の用だ？」

玄関の戸を開けた手紙の受取人は、目の前の真つ赤な西洋の服を着た少女を奇怪な眼差しで見つめた。

「わ、私は夢と希望の配達人、サンタクロースです！」

蓬は男の警戒を解く為に優しく微笑んだが、逆効果であった。

いくら西洋の文化が流行していても、まだクリスマスマスの風習は仏教国の日本にはほとんど知られていない。キリスト教徒でもない限り、怪しく思うのは当然の反応だろう。男の家に着くまでも、多くの人から未知のものをみるような視線を向けられて、顔から火が出ているんじゃないかと心配するほど恥ずかしかった。

「もしかしてチンドン屋か？ 悪いが、飴は間に合っているんでね――」

男が戸を閉めようとしたので、慌てて蓬は手でそれを阻止する。

「違います！ 私はあなたに手紙を届けに来たのです！」

「――手紙？ じゃあ、お前は郵便局の職員なのか。いつもと違う格好をしているからわからない」

「う、うーん、ちょっと違いますけど……まあ、そんなものです。はい、お鈴さんからです」

蓬は抱えていた魔法の袋から取り出した手紙を渡した。差出人の名前を聞いた途端、男の無愛想だった顔は人が変わったように輝き出した。それから、蓬にとってはどうでもいい話を延々と聴かされた。これが、配達が長引いてしまった一つの理由でもある。

手紙の相手は、遊郭で馴染みの女性からだという。今夜、客を呼んで茶会のするので自分もどうかといった誘いの手紙らしい。

男はまるで孫に自慢話をする祖父のように語りかけていたので、蓬も引き返せず、適当に相槌を打っていた。それほどまでに自分のお気に入りから誘われたことが嬉しいのだろう。

(……でも肝心なのは、お父さんとお母さんにどう言い訳するかですね)

ボウとの出会いや修行のせい、屋敷を訪れた本当の目的――伯父の遺品整理が全く手つかずだったのだ。

(お母さん、すごく怒るでしょうね……。夕飯抜きにされるかも……。ああ、どうしよう。そうになったら楓兄さんのところに逃げ込みましょうか……。)

「お帰り、蓬ちゃん」

「!!! あ、楓兄さん！」

楓に声を掛けられるまで気づかなかったが、考え事をしている間に家の近所まで帰ってきていたのだ。楓は営業を終えた店の暖簾を下げているところだった。

「どうしたんだい？ ひどくやつれた顔をしているけど、何かあったの？」

「聞いてくださいよー。実は私、サンター――あっ！」

サンタクロースと言いかけて、蓬は重大な決まりを思い出した。己がサンタクロースで

あることを周囲に話してはいけないのだ。楓は穏やかに微笑みながら、首を傾げる。

「サンタ……？ もしかしてサンタクロース？」

「え、ああ！ そうです、サンタクロースです！ ほ、ほらもうすぐお正月でしょう。今年の初夢は茄子、富士、鷹じゃなくてサンタクロースとトナカイと驚を見たいな——って。あ、あははは……」

混乱していて、自分でも何を言っているのかよくわからなかった。万事休すと頭が真っ白になったが、楓は小さく笑ってくれた。どうにか誤魔化したそうだ。

「サンタクロースとトナカイは何となくわかるけど、どうして驚なんだい？ 面白い発想だね、蓬ちゃん。——あ、そうそう、ちよつとこつちにおいで。」

楓に案内されて、彼の店の中に入った。連れてこられた理由はすぐにわかった。

「わあ！ 私のあじさい！」

文机の横に、今朝渡したあじさいが白磁の花瓶に活けられていた。当然だが、新聞紙でくるまれていた時よりも美しく見える。

「食べてしまいたいほど綺麗です……」

美しさに見惚れて無意識に呟いた蓬の言葉に、楓は口に手を添えて笑った。今度は何故笑われたのかわからなかった。

「確かにあじさいはとても綺麗だね……。だけど本当に食べたりしたら大変だ。あじさいには毒があるからね」

「ええ！ そうなんですか！？ ビックリです……。こんなにも綺麗なのに毒があるなんて——ああ、勿論、あじさいを食べようなんて全然思っていませんよ。それくらい美しいってことですからね！」

「大丈夫、わかっているよ。……だけど、蓬ちゃんは思わないかい？ あじさいと女性は似ていると……」

楓は壊れ物を扱うかの如く、そつと青々と咲き誇るあじさいに触れた。蓬は青年のよくわからない質問よりも、想い人に頭を撫でられているあじさいになりたかった。

「——どんなに美しく聡明な女性でも必ず底なし沼のように暗く、深い闇がある。綺麗な花を咲かせる毒花と同じだ……」

蓬はいつものように裏口から家の中に入った。仕事の邪魔をしてはいけないと両親に厳しく言われているからだ。

勝手場では、女中の妙子が夕食の支度をしていた。雪里家には住み込みをしている従業員もいるので、勝手場は他家よりも大きい。

妙子は鍋の中の沸騰した湯にワカメを入れながら、その丸い顔だけを主人の娘へと向けた。妙子は、蓬がまだ四つの時に、雪里家で奉公を始めた。妙子とは六つ離れており、彼女は病気に苦しむ母親の薬代を賄う為に日々仕事に勤しんでいる。蓬だけではなく、両親もすっかりものだがどこかそっかしい妙子が好きだった。

「お帰りなさい、お嬢様。お夕食はあと十五分ほど出来ますから居間で待っていてくださいね」

「はい」蓬は明るい返事をして、外に通じる戸を閉めた。

「……あれ？ そういえば、お母さんはどこですか？ 廁？」

常に手を動かしていないと落ち着かない性分の母は、大抵この時間には勝手場にいるのだ。だけど勝手場には、妙子しかいない。

「奥様は緊急の会合にお出かけになりました。少し遅くなるそうなので、先に夕飯を済ましてくださいと言いつけを預かっています」

「……そうですか」蓬は胸を撫で下ろして、居間に向かった。だけど、胸にこびりついたモヤモヤとした気持ちが無くなったわけではない。母に叱られる時が少しだけ後に延びただけなのだ。母の雷を喰らう運命は変わっていない。

二十畳の居間には、檜の長机が堂々と置かれている。この机で、両親と妙子、居候する従業員と一緒に食事をするのだ。

蓬は縁側に立ち、夕闇に染まった庭を眺める。庭には井戸がある他に、信楽や石の灯籠が置かれている。竹の塀に沿って花を咲かせる茂みが植えてあるのだが――、

「……おかしいのです」

今朝まで咲いていた七つのあじさいが消えているのだ。花になりかけのものやまだ蕾のあじさいは残っていた。

調べに行こうと縁側を下りようとした時、料理を運びに来た妙子が答えを教えてくださいました。「さつき、喜一様がいらしていません」

「喜一叔父さんが！？ ……珍しいですね、正月や親族会議の時にしか会わないのに。家に何か用でもあったのですか？」

喜一叔父さんとは、蓬の母の弟だ。「鞠屋」という遊郭で、下働きをしている。

妙子は説明をしながら、テキパキと料理や食器を卓上に並べる。

「お鈴という遊女の命令であじさいを探していたんですって。そこで、毎年あじさいを育てているこの家のことを思い出したそうです」

（――お鈴！ さつき、手紙を届けた人の馴染みの遊女と同じ名前だ。きっと今頃、あの人は大好きな人に誘われたお茶会で浮かれていますよね……）

「なんでもその遊女は、今宵、客にお出しするお茶にあじさいを添えるそうですよ」

「え！？ い、今、何ていいましたか！？」

蓬は、女中に詰め寄った。突然の蓬の行動に、妙子は戸惑い、手を動かすのを止めた。

「だ、だから……さつき、喜一様がお家にいらした――」

「違います！ その後です！」

「遊女があじさいを使ったお茶を、茶会にお出しする――？」

「大変です！！」蓬は傍に置いていた魔法の袋を持ち、家を駆け出した。袋を携えたのは、サンタクロースの道具があれば何かの助けになるかもしれないと思ったからだ。

「お嬢様！？」妙子の困惑した叫びが背後から聞こえたが、事情を話している暇などとてもなかった。

『――だけど本当に食べたしたら大変だ。あじさいには毒があるからね』  
通りを全速で駆ける蓬の脳裏に、楓の教えが響く。

息苦しさを感じるが、蓬は手足を大きく動かし続ける。彼女の足は何も履いていなかった。運動の邪魔となるので、下駄だけではなく足袋までも途中で脱ぎ捨てたのだ。幸いにも、ほとんどの店が営業を終えており、通りには人気が無かったので、裸足で走る蓬に哀れな眼差しを送る者は誰もいなかった。

「——まに……間に合ってください……。そ、そうで……ないと……私……」  
少女の小さな口から白い息と共に、必死の願いが零れる。

「夢と希望ではなく、死への招待状を届けたことになってしまいます！」

「——きゃあ！！」

大柄な男によって、蓬は地面に突き飛ばされる。

手足にかすり傷を負ったが、それでも蓬は諦めずに立ち上がり、自分に乱暴した相手を睨む。男も負けじとパンパンと太った顔をしかめる。

「お願いです！ 通してください！」

「だめだ、だめだ！ 何度も言っているだろう！」

男が頑なに守っているのは、彼の背後にそびえる大きな門だ。彼は門の向こうに広がる男の楽園——遊郭に女子供が侵入しないように番人をしているのだ。

（……早く鞠屋に行かないと大変なことになってしまいます……）

お鈴という遊女が茶に毒を盛ろうとしていると何度も話した。だが、遊郭に入る為に嘘をついているに決まっていると怒鳴られ、全く信じてもらえなかった。一刻を争うので蓬は男を振り切って門をくぐろうとしたが、すぐに取り押さえられてしまったのだ。

緊迫したやりとりをする二人を囲むように野次馬が群がっていた。野次馬は、仕事を終え、これから花街を楽しむ男たちである。蓬たちの揉め事を心配そうに見守る者。まるで相撲試合を見ているかのように心弾ませる者。心境を表す野次馬の顔は、大方この二つのどちらかだった。

「さあ、帰った、帰った！ 女は遊郭の世界に踏み入れてはならないのだ！」

肩を強く押され、蓬はまた倒れてしまう。その時、手から滑り落ちてしまった白い袋の存在に気づいた。

（——そうです！ 袋のことをすっかり忘れていました！ このような事態を考えて持ってきましたのに……うう、私ってうっかりさんですね……って、反省している暇はありませんでしたね！）

蓬は袋を拾い、場を大急ぎで離れた。後方から少女との諍いに勝利したと誤解する番人が豪快に笑っている声が聞こえた。

大門からさほど離れていない人気のない路地裏。そこで蓬は袋の中からサンタクロースの衣装と木彫りのトナカイが動かすソリを取り出した。蓬は素早く見習いのサンタクロースの姿となり、ソリの座席に腰を下ろした。

「良い子ですから、言うことを聞いてくださいね。トナカイさん」

蓬は深呼吸を一つしてから、手綱を小さく引つ張った。トナカイが斜め上にゆっくりと歩き出すのと同時に、ソリも宙に浮く。高さが最上限の五メートルになると、蓬は日中受けた基礎訓練を思い出し、慎重に手綱を扱う。亀の如くのろろの運転だが、慣れない速度でバランスを崩して落ちるよりもずっといい。

そして蓬の作戦通り、ソリは大門の上を通過して遊郭の世界へと乗り込んだ。音も出さないほどのゆっくり運転なので、眼下を歩く人々は空飛ぶソリにまるで気づいていない。分ならず屋の番人が見えたので、蓬はあっかんべえをした。

徐々に闇に染まって行く遊郭。置屋の窓は、内に置かれた行灯の火で橙に染まっている。

窓には仕事に勤しむ遊女や宴会を楽しむ客の影がぼんやりと映っていた。

「……綺麗です」

ソリの真下では、絢爛豪華な着物姿の花魁が禿と部下の遊女を後ろに連れて、通りを闊歩している。ここがどういふところか十分に知っていたが、初めて訪れた遊郭の世界は目を眩ますほどの美しさだった。男がやみつきになるのもわかる気がする。

「あれが鞠屋ですね！ あ、あそこの部屋にいますのは……」

鞠屋の二階の窓は開け放されており、部屋の様子を見渡せた。その為、お鈴と思しき遊女をすぐに発見出来た。

隅の座敷では、お鈴を含め、彼女の前で正座をしている客たちが今まさに問題の茶を飲むようにしていた。

蓬はとつさに、その部屋に向かうように、手綱を通してトナカイに伝えた。トナカイは首を震わした後、進む方向を変えた。

「——お茶を飲んではいけません！ というか、そこどいてください！」

蓬の大声で、ソリが迫ってくることに気づいた客たちは悲鳴を上げ、部屋の四方に逃げる。おかげで人を巻き込まずに、ソリの着地に成功した。遊女は目を見開いただけで、その場を動かなかつた。彼女の膝に置いた手には、湯呑みが握られていた。湯気が立つ黄緑の水面には、毒を持つ花びらが浮いていた。

蓬はソリから飛び降り、客たちの安否を調べる。彼らは今まで座っていたところには、湯のみが転がっており、中身の茶も畳を汚していた。蓬の派手過ぎる登場に客たちは驚き、茶器を手から滑らせてしまったのだ。濡れて茶色く変化した畳の箇所には、あじさいの花びらが付着していた。

（——ぎ、ぎりぎり間に合いましたのね……。よかったです……）

安堵で膝の力が抜けていく。

すると、ようやく事態を把握した客たちが騒ぎ始めた。蓬は小刻みに震える膝を叩いて気合いを入れ直し、堂々とした口調で言った。

「皆さん！ 驚かないでくださいといっても無理でしょうけれど……さっきのお茶には毒が仕込まれていたんです！」

それから顔を青くした男達にあじさいの恐ろしさを説明した。

信じない者もいたが、茶の入れ直しを申し立てる者は誰もいなかった。蓬が話をしている間、お鈴はずっと無言のまま俯いていた。

（こんな状況なのに……どうして落ち着いていられるんでしょう？ ——もしかして……）

蓬は、遊女の前で身を屈める。彼女を初めてしっかりと見た途端、蓬は泣きたくなった。（……うう、神様は残酷です）

華やかな着物やキラキラと輝く簪を身に纏ったお鈴は、同じ女とは思えないほど、とても美しい女性だった。もし蓬が彼女と同じ格好をしても、衣装に着られるだけだろう。次いで、蓬は己のまな板そっくりな胸と彼女の豊満なものを見比べて、悩ましげな息を吐いた。

「……何でありんすか？」

遊女の鈴を転がしたような声を聞いて、蓬は我に返った。

「……お鈴さん。あなたはあじさいが毒を持つ事実を知っていて、茶に花びらを入れましたね」

お鈴は周りを紅で塗った目を細めた。犯人と疑われても、平常心を崩さなかった。むしろ、緊迫した場を楽しんでいるように見える。

「何故そう思うのでござりんす？」

「……あなたの態度です！ 普通、毒が盛られているとわかったら驚きます！ ですが、あなたは異常なまでに冷静でした」

「……」お鈴はわずかに唇の端を上げた。それは自分が犯人であると肯定している笑みである、蓬や客たちは確信した。

「何故なんだい？ お鈴ちゃん」

呆然とする客の誰かが、震える声で言った。

犯人は袖をめくって、殺人を犯そうとした理由を示した。瞬間、蓬と男たちは絶句した。彼女の白く細い腕は、無数の発疹で蝕まれていた。この症状が出る病を蓬を含め、ここにいる全員は知っていた。

「——梅毒……なんですか？」

ええ、とでも言うかのようにお鈴はニッコリと微笑んだ。

梅毒。それは、まだ治療方法が発見されていない性感染症だ。梅毒にかかった者は、ほとんどの確率で死ぬ。売春場である遊郭では、昔から縁が切れない病だ。去年もこの病で、数百人の遊女が命を落としたと聞いた。過去に蓬は川に捨てられた梅毒死亡者を見ている。息をするのも忘れてしまうあの残酷な光景は、頭から一生離れないだろう。

「人にうつされたものだと思っております……」

お鈴は袖を直し、これまで夜の相手をした客たちに視線を送る。彼らは一斉に顔を反らし、後退さる。

「あちきは……いいえ、遊女たちは梅毒で苦しみ死んだ仲間の姿を嫌というくらいに目にしておりんす。梅毒になりたくなくても、春を売ることを生業としているこの世界では何の対処も出来ない……諦めるしかなかったのでありんす。そして、ついにあちきも梅毒を患った……」

袖の上から梅毒に浸食されている腕をそっと撫でながら、嗚咽まじりに話す。

「あちきがいなくなったら、あなた方は他の遊女を選んで楽しむのでありんすでしょう？ 己が梅毒を持っているとは露も考えずに……。その遊女もやがて梅毒になり……。苦しみ悶えて死んでいく。……だからあちきは決めたのでありんす」

「——少しでも梅毒の感染を防ごうとここにいる……あなたの常連の客を殺そうとしたのですね」

「ええ、先の短いあちきに何か出来ないかと悩んだ結果でありんす。もちろん、あちきも彼らと一緒に死ぬつもりでありんした。梅毒とは違い、一瞬の苦しみであの世に逝けるのでありんすから。……ですが、あなた様のおかげでおじゃんになってしまいました」

「……………」

蓬は何も言えなかった。自分がお鈴の立場なら彼女と同じことをするに違いないと、蓬は思った。

その時、脅威的な事実には耐えられなくなった数人の男たちが悲鳴を上げ、部屋から逃げ

て行った。お鈴の恐ろしい企みを店の者に伝えるのだろう。

お鈴は彼らの姿を見送ってから、ゆつくりと毒を含んだ湯呑みを口元まで運ぶ。

「……あちきだけでも早くあの世に逝かないと。……皆様、これから遊郭で遊ぶ時には、梅毒を気にかけてくださいね。それがあちきの最後の願いでありんす」

蓬も彼女を好いていた男たちも、お鈴の行為を止めなかった。

これから事情を把握した店の者がここに来て、殺人を犯そうとしたお鈴を取り押さえる。そうなれば、お鈴は残酷な折檻を受ける運命からは逃れられないのだから、この場で自殺した方がいいに決まっている。

「……こんな鳥籠ではなくて、故郷で死にたかったでありんす……」

湯飲みを口につける直前、お鈴はポツリと呟いた。

同時に存在を忘れかけられている木彫りのトナカイが己を主張するかのように鳴いた。

蓬はハツとなり、自分がサンタクロースの格好をしている理由を思い出した。

「——その願い、叶えられるかもしれません」

「!!」お鈴の手から滑り落ちた湯呑みが畳に転がる。

「そ、それは誠でありんすか？」

お鈴は初めて表情に焦りの色を浮かべて、蓬に詰め寄った。

蓬はしっかりと頷き、花が咲いたような笑みを見せた。

「だって、私は夢と希望の配達人、サンタクロースですから！」

「おお……ありがたや」まるで神を拝むかの如く、目の前の少女に手を合わせていると、廊下から慌ただしい足音と遊女を呼ぶ野太い声が聞こえてきた。

「旦那様です！ 事態を知って、あちきを捕まえに来たのでありんすよう！」

「大丈夫です！ その人、襖を閉めてください！」

「よしました！」客の一人が、逃げた男によって開け放された襖を閉めた。お鈴の最後の願いを叶えたいという気持ちは彼らも一緒らしい。もしくは、愛しい者を病に冒してしまつた罪滅ぼしなのかもしれない。

蓬は素早く袋の中から魔法の鐘を取り出した。襖に向けて鐘を鳴らすと、天井から大きな雪の塊が降ってきて、戸を塞いだ。これで少しは時間稼ぎになるはずだ。お鈴や客から歓声と拍手が沸き上がった。

次いで、蓬はソリを袋の中にしまうのと入れ替えに、雪の結晶の形をした飴を手にした。窓際に寄り、それを口に含む。薄荷の味だった。

蓬は完全に日が落ちて、黒色と化した空を目がけて息を吹いた。吹き出した息は白く、星の如くキラキラと輝いていた。すると、白い靄はだんだんと氷に姿を変えた。

(……すごい。それに綺麗です)

空中に氷の道が現れたのだ。下を歩く客や遊女も道を見上げて、口をポカンと開けている。蓬は恐る恐る道に足をかけた。氷の橋は薄いわりに、案外丈夫で安心した。大人が十人以上乗ってもヒビすら入らないだろう。また、ブーツには滑り止めがついているらしく、氷の上でも大地を歩いているのとまったく変わらなかった。

「さあ、行きましょう。お鈴さん」

蓬は呆然としている遊女に手を伸ばした。

「え、ええ」我に返つたお鈴はおっかなびっくり、差し出された手を握った。蓬が安全だ

と証明しても、やはり氷の道に一步踏み出すのは勇気がいる。

「手を離さないでくださいね。私は大丈夫ですけれど、滑って落ちてしまいますから……。それでお鈴さん、故郷はどこですか？」

「日野でありんす」蓬の手を支えにして、道に体重を乗せながら答えた。

「……ここから西の方向ですね。任せてください！」

蓬は途切れないように息で道を作りながら、日野を目指した。頬に当たる風は皮膚が破れるのではないかと心配になるほど冷たいが、空中散歩はとも心地良かった。ようやく氷の道に慣れたお鈴が安堵の笑みを浮かべながら、自分の身の上を語り始めた。

彼女の本名は美鈴といい、借金肩として数年前に遊郭に売られたのだという。蓬は何と返せばよいのかわからず、「……それは大変でしたね」と同情することしか出来なかった。

遊郭を出て約二時間後、どうにか目的地に辿り着いた。蓬は大地に道を繋げ、空中散歩を終える。辺りの田畑や森は空と同じく、黒に染まっている。

遊女が大地に足をついたのを見送ってから、蓬は繋いでいた手をそっと放した。念願の故郷に帰ってきた彼女は細めた目で辺りを見渡し、郷愁に浸る。

「……お鈴さん、これからどうするつもりなのですか？」

「愛しい家族の傍で残り短い命をまっとうするつもりでありんすよ……」

そう静かに言い、今自分が生きているのかを確かめるように左胸に触れた。

「梅毒が少しずつ身を焦がしていくのでしょうか……あなた様のおかげで最期まで耐えられる自信があったのでありんす。——ここは籠の中ではないのでありんすから！」

お鈴が見せたのは、可憐な遊女には似合わない野蠻な笑みだった。でも、蓬にはそれが彼女の本当の笑みだと確信した。

(こっちの方がとても生き生きとして……とても素敵です！)

その時、近くの寺が時刻を知らせる鐘を鳴らした。耳をすまして、鐘の打つ回数を数えた蓬の顔から血の気が失せた。

「暮れ五つ！(現在の午後八時) 大変！ 早く家に帰らないと！」

それでも夜遅くまで出歩いた事実は変らないので、両親からの叱責は免れないだろう。伯父の遺品整理を放棄してしまった件もあるのだから。

「で、では、お鈴さん！ 私はこれにて失礼しますね！」

「ありがとうございます。あなた様にしていただいたご恩は冥土の世界に逝っても、絶対に忘れないでありんす。ええと……ごめんなさんし……もう一度、名前を伺ってもよろしいてありんすか？」

蓬は赤い帽子を取り、ニッコリと微笑んだ。

「サンタクロース！ 夢と希望の配達人です！」

まだ見習いだが、蓬はサンタクロースであることが今初めて誇らしく感じた。

翌朝。蓬の活躍は朝刊の一面を飾った。

蓬は母特製のかぼちやの煮物を届ける為に、楓の元を訪れていた。営業前なので楓の質屋にしているのは、蓬と彼だけだ。外の通りから、開店の準備に勤しむ従業員たちの声が聞こえる。

「——サンタクロースと名乗る少女によって、遊女の殺人計画を阻止した。だが、驚くことに少女は空に氷の道を作り、遊女と共に姿をくらました。少女は一体何者なのか!？」  
文机の前に座る楓が読み上げる記事を、蓬は罰の悪そうな顔をして耳を傾けていた。楓の目の前に、問題の正体不明の少女がいるのだ。どう反応すればよいのかわからなかった。ちなみに昨夜は日付が変わる時刻まで、両親に烈火の如く叱られた。それに東京と日野という長い距離を往復したせいで、蓬は精神だけではなく、体力も底をついていた。立っているのもやっとである。

「面白いな。殺人者を逃がすなんて……これじゃあ、善人か悪党なのかわからないじゃないか。だけど、僕は——」

「パサリと新聞を畳んで、楓は小さく微笑んだ。

「この少女が好きだな」

「!!」一瞬にして、全身が熱くなった。

想いを寄せる青年から「好き」という言葉が聞けたのだ。感激のあまり、体に重くのしかかっていた疲労はどこかに飛んで行ってしまった。

「……………」

しかし、少女の高まっていた気持ちはすぐに落ち着いた。疲れが徐々に体に戻ってくるのを感じる。

（……楓兄さんが好きと言ったのは、私ではなく、見習いサンタクロースの蓬なんですから）

この場で自分がサンタクロースであると告白したいが、正体を明かしてはならないという鉄の掟があるので、それは許されない。

蓬は火照った頬が冷めるのを待ってから、代わりに別のことを口にした。

「ち、ちなみに……そのサンタクロースのどういうところが好きなんですか!？」

自分に向けられるものではないと心に言い聞かせているが、どうしても意識してしまい、声が震えてしまった。

楓は文机に飾られたあじさいに目をやり、いつもの穏やかな笑みを浮かべた。

「素直なところかな。利益だけが欲しいなら、わざわざ遊女を逃がしたりはしない。遊女には殺人を企むほどの悲しい事情があつて、少女は彼女を救いたって思ったんだろう。」

……是非とも少女に会ってみたいな。きつと、明るく優しい子だろうな」

再び、体を焼き焦がさんとする熱が全身を襲った。

挙動不審となった蓬を見て、楓は心配そうに首を傾げる。

「大丈夫? 達磨みたいに赤くなっちゃって……。具合でも悪いの?」

「あ……私、今日も伯父の遺品整理がありますので……失礼します!!」

いてもたってもいられなくなり、蓬は全速力で店を後にした。

閉めた戸を背にして蹲り、師走の冷たい風で混乱した己を落ち着かせる。気持ちの整理を終えると、すっかり冷たくなった頬を叩いて、立ち上がった。

「よおし! 今日こそは伯父さんの遺品を片付けますよ! そして……」

蓬は雲一つない青空に向けて拳を突き上げ、心の中で叫んだ。

（サンタクロース修行も頑張りますよ!）

蓬と別れた後、楓は自室に戻った。

「お待たせして申し訳ありません」

蜜柑が入った籠が置かれた長机の前に正座をしている鷺男——ボウに一礼してから、己も腰を下ろす。

(……いつも被り物をしているけど、苦しくないのだろうか)

無口の恩師に会う度に、楓は不思議に思う。ボウとは十年以上の付き合いであるが、彼の素顔を見たことはまだない。

少しの沈黙が流れ、やがてボウがポツリと呟いた。

「……昨夜はごくろうだったな」

昨夜とは、師走の二十四日——クリスマスイブのことだ。サンタクロースの楓は、キリスト教を信仰している日本の子供に贈り物を配達していたのだ。

(……子供たちはもう目を覚ましたかな。枕元に届けた贈り物にさぞかし驚くだろうなあ……)

子供が贈り物に大喜びしている場面を想像し、小さく笑みを零した。

楓の家系は代々、サンタクロースの素質を継いでいた。楓は六歳の時に日本を離れ、フィンランドの聖キリシアサンタクロース学院に入学した。学院で十二年も文武両道に励み、一人前のサンタクロースになったのだ。学院を卒業した楓は帰国し、実家から離れたこの地で一人質屋を営んでいるのだ。

目の前の鷺男は、自分を立派なサンタクロースに育て上げた教師なのだ。

「あの子……蓬は帰ったのか?」

「はい。伯父さんの遺品整理に行くとかで」

「そうか……」

昨日突然、ボウが我が家を訪れた。理由を尋ねると、仲の良い隣人の少女がサンタクロースの素質を持っており、彼女が見習いを卒業するまで、家に泊めて欲しいとのことだった。楓は恩師の頼みを快く引き受けた。また大好きな教師と一緒にいられて嬉しかった。

楓は懐から、縁を雪の結晶の彫刻で施した手鏡を取り出した。窓から射しこむ朝日を反射している鏡は、通りを走っている蓬の姿を映し出している。

朝刊に載っていた正体不明の少女は、蓬のことらしい。配達を終えた自分に、魔法の鏡で彼女の行動を見守っていたボウが教えてくれた。

「あいつはたくさんの贈り物を配ったな。死ぬはずだった客には未来を、籠の鳥だった遊

女には幸せを——」

「優秀なサンタクロースになれるかもしれませんね。先生」

ボウはしっかりと頷いた。被り物のせいでどんな表情をしているのかわからないが、きつと満足そうな笑みを讃えていたに違いない。

「——さて、俺もそろそろ行くとしよう。優秀なサンタクロースを育てにな」

ボウは鏡を懐にしまい、手持ち型の緑色の鐘を手にした。カランカランと鐘を鳴らすと、恩師の体は雪に包まれ、見えなくなった。

「いってらっしゃい。先生……」

雪が晴れると共に、ボウの姿も跡形なく消えていた。

楓は今の今までボウがいたところをしばし見つめた後、立ち上がった。そろそろ、開店

の準備をしなければならない。

「――蓬ちゃんと一緒に贈り物を配達する日が待ち遠しいな」

楓はサンタクロースの格好をして微笑み合っている自分と蓬を思い浮かべて、小さく笑った。